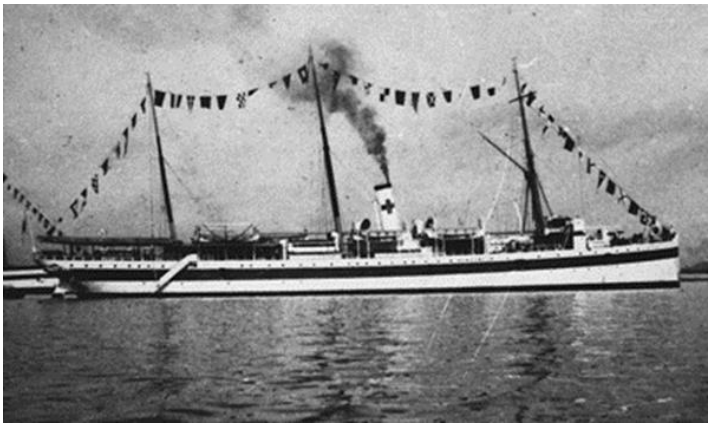
2019年1月26日　東大駒場

横浜丸（初代）と台湾直航線の開設・余話　　山田　廸生

＊漢字は常用漢字を使用　　横濱丸⇒横浜丸

１）横浜丸（初代）



←陸軍病院船時代（日露戦争時）

船主：日本郵船（新造時は郵便汽船三菱会社）
船材：**鉄**・『明治23～28年船名録』＆『三菱社誌』。**鋼**・『ロイズ船名録』。**鋼&鉄**・『明治30年～船名録』
総トン数：2,305 GT。長：300尺（90.9m）、幅：35尺（10.6m）。甲板数：２層
主機：　２連成１基。最高速力12.5kt。竣工：1884（明17）年3月。建造所：英ロンドン＆　グラスゴー造船所
旅客定員：１等43名、２等16名、３等430名、計489名　　＊出所：日清戦争時の『船名録』等
《船　歴》
・1884（明17）年：英国で完成（3月）。横浜回着（8月）。横浜～神戸線就航（11月）
・1885（明18）年：明治天皇西国巡幸で乗船（7・8月）。日本郵船移籍（9月）。横浜～上海線就航（10月）
・1894（明27）～95（〃28）年：陸軍御用船となる
・1895（明28）　：征清大総督小松宮彰仁親王旅順から横浜丸で凱旋（5月）
・1895（明28）年：**台湾総督樺山資紀・文武各官が座乗。船上で台湾受渡式をおこなう（6月）**
・1897（明30）年：台湾直航線（神戸～門司～基隆）に就航（4月）
・1904（明37）～06（〃39）年：陸軍病院船となる
・1907（明40）年：神戸～大連線に就航　　・1910（明43）年：解体のため売却

２）台湾受渡式に関わった２隻（横浜丸、公義）

日清戦争後の1895(明28)年４月に調印された講和条約（下関条約）により日本への台湾（&澎湖列島）割譲が決定。受渡しは批准書交換後（5月8日）２か月以内に完了とする（条約第5条）。受渡式は６月２日、台湾北東三貂角沖の澳底（おうてい）に碇泊する**横浜丸**で行われた

（左）日本国全権・樺山資紀（1837～1922年）
薩摩藩出身の海軍軍人。初代台湾総督をつとめる
（右）清国全権・李経方（1855～1934年）
安徽省出身。清末の外交官僚。李鴻章の甥。養子となる。
駐日公使。下関条約の清国全権委員のひとり

《史書により異なる受渡式の場所》

・台湾総督府法務部『台湾匪乱小史』：**西京丸**　　・原田敬一『日清・日露戦争』（岩波新書）：**台北の北**の海上

・伊藤潔『台湾』（中公新書）：三貂角沖の海上　　・参謀本部『明治二十七八年日清戦史』：三貂角沖の**横浜丸**

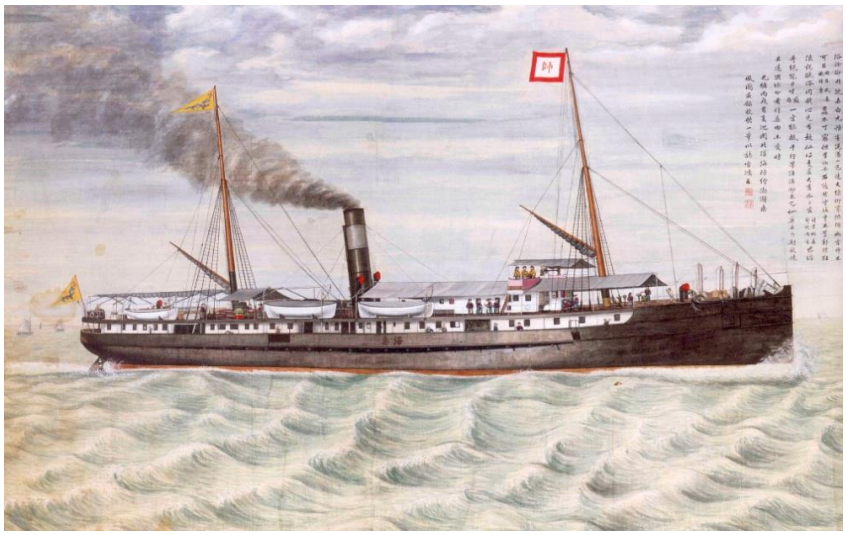
《清国全権を乗せてきた**公義**の正体》

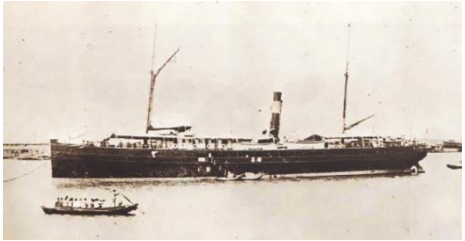
「六月一日午後四時二十六分、清国全権委員李経方の一行を載せたる独逸汽船公義号（公義号は其の実清国招商局の汽船なるに独国の旗幟を掲げ来れり。蓋し清国官吏が単独の航行に杞憂を抱きし為めならんといふ）は、我が高千穂艦に護衛せられて到着するあり」（伊能嘉矩『領台十年史』明治 38 年新高堂）

《「巡閲北洋海防図」台北故宮博物院蔵、絹本着色、316×251cm》

1886（明 19・光緒 12）年４月、海軍大臣（総理海軍衙門）醇親王奕譞（えきけん。道光帝の子息で光緒帝の父）が海晏に座乗し天津を出港、清国艦隊と旅順、煙台等の海防施設を巡閲した様子を描いた図

「甲午戦争之後、它又暫時易幟、改懸独国旗、並将船名暫改為『公義号』、搭載李経方前往東瀛割譲台湾」（周維強「巡閲北洋海防図与海晏輪」―『故宮文物』2013.8 故宮博物院刊）





米旗昌輪船公司（Shanghai Steam Navigation Co.）の貨客船盛京として、1874（明治 7）年江南造船廠で完工し上海～福州航路に就航。当初は外輪推進。1877（明 10）年に招商局が購入し海晏と改名。スクリュー推進に改装。日清戦争時に船名を公義と改め、船尾にドイツ国旗、檣頭に黄龍旗を掲げた

研　究　課　題

1）台湾平定作戦における軍医森鷗外

◎鷗外が台湾総督府陸軍局軍医部長を１か月で罷免になったのは何故か？
◎攻撃力の弱い近衛師団が投入されたのは何故か？

台湾平定作戦時の鷗外

・1894（明 27）年：中路兵站軍医部長として朝鮮へ（８月）
　　第二軍兵站軍医部長として清国へ（10 月）
・1895（明 28）年：軍医監（旧・大佐相当官）に就任（４月）
　　台湾総督府陸軍局に属す（５月）
　　30 日澳底に上陸し天后宮に宿す（〃）　⇒

総督府官房衛生事務総長を受命（7月）

第二軍兵站軍医部長を免じ、台湾総督府陸軍局軍医部長を受命（8月8日）

台湾総督府陸軍局軍医部長を免ぜられ石坂惟寛と交代（9月2日）

・石坂惟寛（いしざかいかん）。備前国出身。適塾に学ぶ。西南戦争に出征。1894（明27）年軍医総監（旧・少将相当官）に進級。医務局の序列第2位。鷗外に代り台湾総督府軍医部長に就任。翌年1月第3位の土岐頼徳と交代

・土岐頼徳（ときよりのり）。美濃国出身。1895（明28）年軍医総監。医務局長石黒の指示を無視し麦飯を給与

澳底の近衛師団上陸地点⇒

《台湾平定作戦 or 台湾領有戦争 or 乙未戦争》

5月 25 日、台湾人は台湾巡撫の唐景崧（とうけいすう）を総統に台湾民主国を建国。清国残留軍と、客家主体の義勇軍を擁して日本軍（近衛師団ほか）と戦った。作戦は日本軍有利に展開。民主国要人は大陸に逃亡した。しかし中・南部では、台湾人義勇軍の抵抗と疫病（コレラ、赤痢、脚気、マラリア）のため苦戦。軍属を含む約 73,500 人を投入し制圧に5か月を要した。次表は日清戦争・台湾平定作戦における地域別の日本軍戦死者、病死者数である

	戦死者	病死者		（陸軍省編『明治二十七八年戦役統計』）
台湾	151 人	**7,353 人**	⇒	**主な死因：コレラ 3,689、脚気　1,040、赤痢　783、マラリア　472 人**
朝鮮	221	1,244		**入院者数：コレラ 5,409、脚気 16,886、赤痢 3,632、マラリア 8,804 人**
清国	454	4,619		

2）神になった近衛師団長北白川宮能久親王

◎能久親王が神格化されたのは何故か？

《北白川宮能久親王》

1847（弘化4）年伏見宮邦家親王の第9皇子として出生。仁孝天皇の猶子なる。日光輪王寺に入寺得度し公現入道親王を名乗る。戊辰戦争では幕府側に付き、彰義隊の上野戦争に巻き込まれた。その後仙台藩に身を寄せ奥羽越列藩同盟の盟主に擁立されたが、新政府に降伏。還俗。軍籍に身を置きプロシアに軍事留学。留学中、北白川宮を相続し、帰国後、陸軍中将に昇進。台湾平定作戦では近衛師団長として出征した

・親王関連の作品：森鷗外『能久親王事績』、吉村昭『彰義隊』、台湾映画『1895 乙未』

← 能久親王の銅像（皇居北の丸公園に現存。台湾平定戦に随行した近衛騎兵新海竹太郎制作。明治 36 年 1 月除幕）

《台湾神社、台南神社の建立》

・能久親王は南進中、嘉義付近でマラリアを発病。台南の豪商呉汝祥邸に入り石坂惟寛ほかの治療を受けたが、10 月 28 日死去。柩は安平から西京丸で横須賀に運ばれた（軍艦吉野が護衛）。国葬ののち豊島岡に埋葬された

・1897（明 28）年、第３代乃木総督は能久親王の神殿建設取調委員会を設けて神格化を計画。1900（明 33）年、「別格官幣社を台湾に建設する決議案」が衆議院で可決し、能久親王は古３神とともに台北の官幣大社台湾神社に祀られることになった。鎮座式は翌年 10 月 27 日に行われた。神社跡には現在、円山大飯店が建っている

・病没時の建物は台南御遺跡所となり、1923（大 12）年、親王を祭神とする官幣中社台南神社に発展した

・台南神社跡には台南市立美術館が建設され、昨年 12 月に開館している

・このほか基隆神社（明 45 鎮座）、新竹神社（大７）、彰化神社（昭２）等も親王と古神を祭神としている

（上）能久親王が病没した台南の豪商呉汝祥邸

（左）1937（昭 12）年時点の台南。左下に台南神社

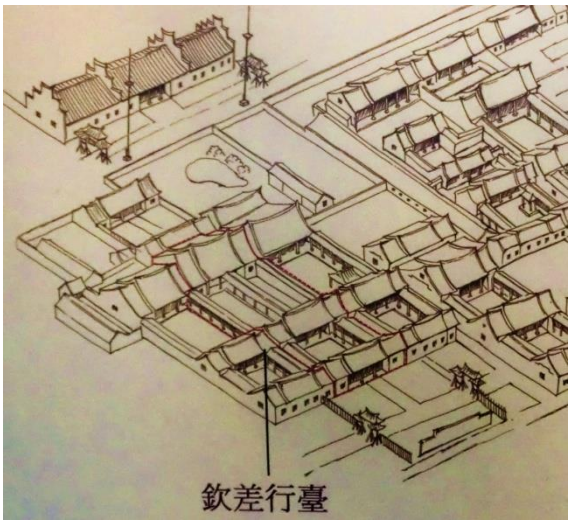
（左）台湾神社　（右）台南御遺跡所

台湾ところどころ

基隆中心図　　（右上）陽明海洋文化芸術館
（旧日本郵船基隆支店）

（右）戦前の郵船&
商船の基隆支店
（左）現在の台湾総
統府。旧台湾総督府

（左下）現在の欽差行台（台北植物園内に移築）
（右下）欽差行台大堂の現況



（上）中山堂。日本統治時代の**台北市公会堂**
欽差行台はこの場所にあった

台南中心図
（右上&右）国立台湾文学館。かつての**台南州庁**
（右下）台南、**林百貨店**

（上）嘉義史蹟資料館。かつての**嘉義神社社務所**（左）神社参道